



第10回

調理

柳 幹康

インドにおいて僧侶による調理は原則禁止されていたのに対し、中国の禅宗では調理を担当する「典座」という役職を設けました。今回はその様子について紹介いたします。

そもそもインド仏教の僧侶にとって、口にすることが認められていたのは原則、他者から施された調理済みの食物のみでした。他者より受けたものでなければ食べてはいけない——これを不受食戒ふじゆじきかいといっています。この規定は、祠ほくらや墓場の供物を盗み食くわいした僧が世人から非難されたために設けられたと伝えられています。

また飢饉ききんなどの緊急時を除き、僧侶が穀物を煮たり焼いたりすることも禁じられていましたばつそうもくかい（伐草木戒）。そのようなことをすれば、「植物の生命を奪った」と世間から響ひんしやく響をかうからで

す。（ちなみに緊急時の解禁措置は「儉開八事」と呼ばれ、調理のほか普段は禁じられている精舎内での穀物の貯蔵なども許容されました。）

加えて僧侶は火を起すことも禁じられていました。この禁止事項は、ある僧侶が木を燃やしたところ、その中から蛇が出てきて大騒ぎになり、世人に批判されたことにより制定されたそうです（露地燃火戒）。

仏教が中国に伝わってからも、僧侶は律に従い自ら調理することはありませんでしたが、禅宗ではやがて寺内の食事を司る「典座」の役職を設けるようになります。「典座」とは元來、座席の順次指定など雑事を典つかさどる役職の名称で、遠くインドまで遡るものです（摩訶僧祇律）（卷六）。中国の禅宗はその職名を踏襲する一方

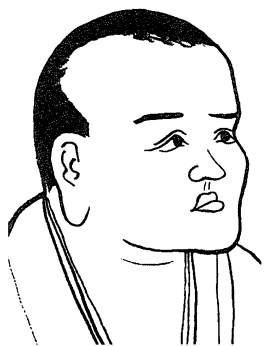
で、それに新たな職務——インド以来禁止されていた調理——を割り当てました（『祖庭事苑』卷八「雑志」）。現存最古のまとまった清規（禪僧の規範）には、次のように記されています、「典座の職は、皆の食事を司るものである。……部門で能力のある僧侶を選び任命せよ」（『禪苑清規』卷三「典座」）。当時、有名な禪師のもとには数百数千もの修行僧が雲集しており、彼ら全員に食事を提供するの文字通り禪寺の修行生



米盆覆却（絵本宝鑑光）卷五、個人蔵

活を根底で支える重要な仕事でした。

また日本曹洞宗の祖道元（一一二〇—一一五三）には典座の心構えや作法などをまとめた『典座教訓』という著作があり、そこには以下のように説かれています。「古来、典座の職は、仏道を求める深い心を発した者だけが務めてきたものである。思うにそれは、典座の職が、純粹で雑念を交えぬ仏道修行そのものであることによるのだろう」、「世間一般の料理人や給仕係などと同じだと考えてはならない」、「誠実に食事の準備を行なうのであれば、典座の一挙手一



道元（普及版仏教イラスト大図典）

国書刊行会、一九八九年）

投足はすべて、仏としての自分を養い育てていく行為となる」。最後に食事を取る場所について附言したいと思います。

中国仏教では古来、坐禅・睡眠は「僧坊」、食事は「食堂」で為されていたのに対し、唐代に隆盛した禅宗ではその全て——坐禅・睡眠・食事——を皆「僧堂」と呼ばれる一つの建物で行なうようになりました。ところが後に（恐らく明代以降になると）食事の為の「齋堂」（食堂とも）という建物が建てられ、坐禅を行なう建物は「禅堂」と呼ばれるようになります。当時の寺の碑文には「食堂を東に建て、これに庫院（厨房）を附す。禅堂は西に建て、方丈（住持の居室）の近くに配する」、「禅と食を混ぜてはならない」と刻まれています（『金陵梵刹志』卷三「奉勅撰靈谷寺碑」）。なお睡眠の場も「寮舎」という別の建物に移ったようです。

この新しい習慣を日本に伝えたのが隠元隆琦（一五九二—一六七三）の黄檗宗で、萬福寺の境内には東に「齋堂」が、西に「禅堂」が、互いに向き合う形で建てられています。なお臨済宗の専門道場では今日、食事の際に場所を庫裡

の広間や廊下などに移しますが、これは坐禅と食事の場を分ける黄檗宗の影響だと言われています。それに対し古い形を保っているのが曹洞宗で、永平寺・総持寺では今でも「僧堂」という一つの場で坐禅・食事・睡眠の全てが為されています。

【主な参考文献】何孝栄『明代南京寺院研究』中国社会科学出版社、二〇〇〇年。鏡島元隆・佐藤達玄・小坂機融『訳注 禅苑清規』曹洞宗宗務庁、一九七二年。佐々木閑『典座に関する一考察』、『禅文化研究所紀要』一九、一九九三年。鈴木智大「宋・元・明代の禅院における僧堂の変容」、『駒澤大学禅研究所年報』一九、二〇〇八年。中村璋八・石川力山・中村信幸『典座教訓・赴粥飯法』講談社、一九九一年。韓志晩『韓国高麗時代における禅宗寺院の伝来と展開』博士論文（東京大学）、二〇〇九年。平川彰『平川彰著作集』一〇・一六、春秋社、一九九四・二〇〇〇年。横山秀哉『禅の建築』彰国社、一九六七年。

柳 幹康（やなぎ みきやす）

一九八一年栃木県生まれ。二〇一三年東京大学大学院博士課程修了、博士（文学）。現在東京大学東洋文化研究所准教授、花園大学国際禅学研究所副所長。

お願い

花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の郵便はがきを使用し、各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。

*ㄨ切りは毎月1日です。

『花園』へのご意見・ご感想など

本誌へのご意見・ご感想など、「編集室花園係」までお送りください。
お待ちしております。



〒616-8034 京都市右京区花園木辻北町1
妙心寺派宗務本所内編集室
俳壇／歌壇／花園 係

*住所、氏名を必ずお書きください。

*俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)

*なお投稿はお返しいたしません。

花園
hanazono

「いつもココロに花園を」
あなたとわたしのポケットエッセイ集

【花園】第74巻 第1号(通巻第869号)
令和6年1月1日発行(毎月1日発行)
定価60円

【発行人】野口善敬

【編集人】箱崎善法

【印刷人】古崎良一

【発行所】京都市右京区花園木辻北町1
妙心寺派宗務本所 教化センター
振替／01060-9-1400
電話／075-463-3121

表紙の絵

「飛翔」



無病息災、
活力旺盛を願って。

絵・元塚 葵(もとば あおい)

月刊『花園』1冊送りの年間購読料は、1,620円(税・送料込)です。
下記のお電話か、ホームページでお申込みください。

【妙心寺派宗務本所 頒布課】電話：075-467-2990

【妙心寺派直売店 web shop】

<http://www.myoshinji-shop.jp/fs/myoshinji/g05-0002>

*乱丁、落丁本はおとりかえいたします。